

平成21年度文部科学省

「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラム採択

短期大学士力養成のための具体的実践としての キャリア教育の推進

—最終報告書—

平成23年3月

京都光華女子大学短期大学部

「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラム採択
短期大学士力養成のための具体的実践としてのキャリア教育の推進
最終報告書

目 次

はじめに

1. 取組の概要

- 1. 1 取組の趣旨・目的
- 1. 2 全体概要
- 1. 3 取組体制

2. 取組の実施結果

- 2. 1 入学前導入教育
- 2. 2 新入生体験学習研修
- 2. 3 短大ポートフォリオの運用
 - (1) eポートフォリオシステムの概要
 - (2) 週間ポートフォリオ
 - (3) 学期ポートフォリオ
 - (4) 達成感ポートフォリオ
 - (5) キャリアポートフォリオ
 - (6) 教職員用キャリア教育推進ポートフォリオ
 - (7) ポートフォリオについての調査結果
 - (8) 達成感ポートフォリオのフィードバック
 - (9) ポートフォリオ各種マニュアル
- 2. 4 ライフデザイン学科の体験研修
 - (1) 国内研修
 - (2) 海外研修
- 2. 5 伝統文化の講演，こころの講演
- 2. 6 「自己の探求」プログラム
- 2. 7 キャリアマインド喚起プログラム，各種資格・就職対策講座
- 2. 8 社会人基礎力診断
- 2. 9 こども保育学科の就職先訪問調査
- 2. 10 こども保育学科卒業生の体験録
- 2. 11 キャリアアドバイザーとの面談・求人開拓
- 2. 12 合同報告会

(資料)

- ① 調書
- ② 学生配布用リーフレット
- ③ 合同報告会ポスター
- ④ 合同報告会発表資料
- ⑤ キャリア教育学会発表資料

あとがき

はじめに

建学の精神と「短期大学士力養成のための具体的実践としてのキャリア教育の推進」

学長 一郷 正道

本学の建学の精神は、校訓「真実心」に示される。この言葉は、本学の創設者が親鸞聖人の文献から採られた。その文献を渉猟すると、真実心とは、慈悲の心である。それは、他者への配慮、思いやりの心、共に支えあう心等と換言できる。

慈悲の心は、智慧とならぶ仏教の基本的な徳目である。知恵はブッダの悟りの内容である。それは、私という存在が他者との関係の中に生かされている相対的存在でしかないことの発見である。ブッダの悟りは、ブッダ一個人の苦からの解放にとどまらず、苦悩する他者全人への救済にむけて慈悲として自ずから働き出るものである。智慧が慈悲へと展開して一切衆生を救うというのが仏教の道理である。自己を省察する智慧は自ずと他者へ向かう。したがって、慈悲とは、利他の心である。

本学のこの建学の精神は、「京都光華のエンロールメント」という学生支援体制となる。この取組は、在学中は言うまでもなく入学以前から卒業後も一人ひとりの学生さんに親身になってきめ細かく対応しお世話させていただく、という教育体制を敷くことになる。

本学が『「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム』に採択され、「短期大学士力養成のための具体的実践としてのキャリア教育の推進」というテーマのもと、とくに力点をおいたのが、種々なポートフォリオの作成であったといえよう。ポートフォリオを活用して教育実践を進めている他学の先行例を参考にしたものではあったが、学生のみならず教職員も含めての取組であった。ポートフォリオの作成は、内容的にも、時間的作業という点からいって、自己省察、自己究明の適切な方便といえよう。学生が、毎週また毎学期ごとに自己の予定を立て達成目標を掲げ、その成果を厳しく評価し、報告し、教員からコメントを付してもらい、というこのプロセスの実践は、自律的な学生生活を送るための貴重な体験となったであろう。大学へ入学しても自分の将来のキャリアをなかなかデザインできない学生が多いなか、このポートフォリオの蓄積により、自分の正体を反省かたがた把握することが可能になり、人生設計に資するところ大なるものがあると確信する次第である。

本 GP プログラムの成果報告にあたっては、本学担当者の提案によって近隣5短期大学（聖泉、滋賀、京都西山、大阪音楽、京都光華）が協同して合同報告会をもつことができたことは画期的なことであり、非常に有益であったと自負している。協同開催のため、事前調整として幅広く意見交換の機会をもつことができた。また、参会者にしてみれば1日で5校の成果報告を傾聴できたわけで実に効率的であったといえよう。

2年間の本プロジェクトへの取組が、本学の建学の精神の具体化、京都光華のエンロールメントの具体的実施となったことを喜びとするところである。

1. 取組の概要

1. 1 取組の趣旨・目的

(1) 目的

キャリア教育の位置づけ

現在の大学・短期大学の大きな課題として、ユニバーサル段階の大学・短期大学へのフルモデルチェンジをいかに図るか、ということがある。これまでは、この課題に対して懐疑的な声はなきにしもあらずだったが、現在では、その必要性は大きく顕在化しているといえる。それは、特に社会の側から、現在の社会のニーズと大学・短期大学での教育内容との間にギャップがあるという指摘があったことが1つの理由である。その社会のニーズの内容は、「社会人基礎力」という名で呼ばれることが多く、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」からなるとされる [1]。これらはいずれも肯定的に評価できるばかりか、明示的に教育目標として掲げてこなかったものの、いずれも学生に身に付けて卒業してほしいと期待されていたものばかりであるので、大学人の受けた衝撃は大きかったといえよう。

キャリア教育の第一義的役割は、上で述べた社会と大学・短期大学との間のギャップの解消にある。したがって、その位置付けはきわめて重要なものになっている。同時に、現在のキャリア教育は、その取組を、ユニバーサル段階の大学・短期大学へのフルモデルチェンジを図るための転換のムーヴメントとして捉えることも重要である。

社会のニーズと大学・短期大学の教育内容のギャップ

社会のニーズと大学・短期大学の教育内容にギャップがあることを示す例として図 1-1 をあげる [2]。グラフの中の赤い線は、企業がそれぞれの能力についてどの程度必要と考えているかを表す。また黄色い棒は、企業がそれぞれの能力について学生に既にどの程度身に付けていると考えているかを表す。

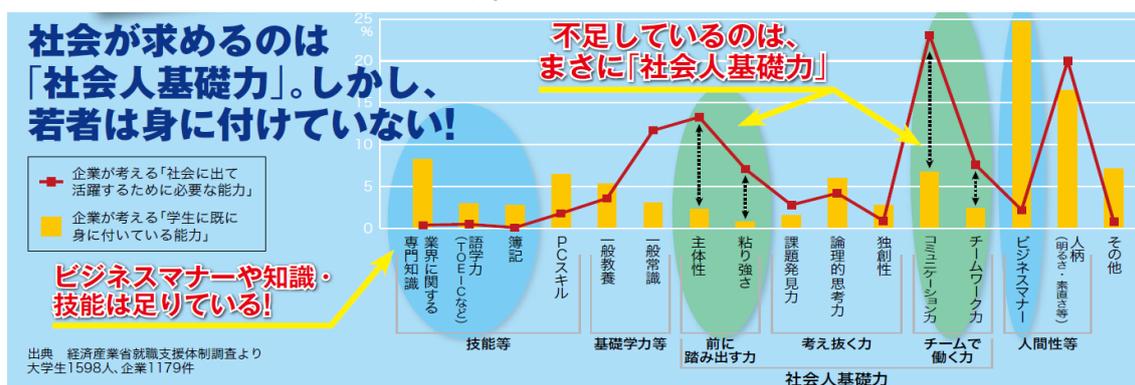


図 1-1 社会は社会人基礎力を求めている

これによると、専門知識やビジネスマナーについては学生は十分身に付けていると企業は考えており、一方、主体性、粘り強さ、コミュニケーション力、チームワーク力という社会人基礎力については身に付けていないと考えていることがわかる。

社会人基礎力を育成する場

では、社会人基礎力はどのように育成すればよいのか。

従来は、もちろん社会人基礎力という言葉もなかった。これに相当する能力は、個別科目やクラブ・サークル活動の中で無意識のうちに身に付くものとされてきた。しかし、今では、この2つの場だけでは社会人基礎力の育成は困難になってきた。そこで、現在必要とされるのが、社会人基礎力育成を直接の目的とした正課授業・課外授業の設置である。また、もちろん個別科目やクラブ・サークル活動に代表される自己教育の場も重要であることには変わりない。ただし、個別科目においては、これまでのように無意識、非明示のままではいかに、社会人基礎力育成の観点の意識化、目的化が必要である。以上、①個別科目、②社会人基礎力育成を直接の目的とした正課授業・課外授業、③自己教育の3つが社会人基礎力を育成する場となる。

本学ではこの3つの場を本取組も含めてどのように活性化しようと考えているかをまず述べておく。①については、到達目標型教育への転換を通じ、社会人基礎力育成の意識化・目的化を活性化していく。②については、ポートフォリオシステムを学生に提供することから始めていく。③については、本取組外であるが、「自主活動誘導プログラム」を導入することにより、従来の自己教育の場を復活させていく。

「短期大学士力」について

本取組名称に掲げている「短期大学士力」について一言説明する。この言葉は、短期大学の今後の改革を考える上で重要な文献である、『短期大学教育の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と機能—』（日本私立短期大学協会、2009.1.16）からとったものである。この文献の中に次のような一節がある。「…短期大学では、短期大学士課程共通の、学科・専攻を超えた分野横断的な学習成果目標、卒業時に習得すべき能力を規定する必要がある。これを仮に「短期大学士力」と呼ぶ。…」これからわかるように、「短期大学士力」というのは、必要とされる力を、どのような課程で養成されるのかという養成課程の衣でくるんだ概念であり、その意味で「学士力」とほぼ同種である。衣をとると、そこには社会人基礎力があると考えてよい。したがって、ここでは「短期大学士力≒社会人基礎力」と考えて構わない。

(2) 計画の要点

キャリア教育の体系

キャリア教育は上述のように重要な位置づけにあるので、その内容は、単に正課外として就職支援だけをすればよいということにはならない。就職支援をはじめとするさまざまな正課外プログラムの提供とともに、むしろ正課教育の改革が重要になる（図 1-2 参照）。

さらに、正課教育、正課外プログラムを提供するだけでは不十分であり、それを受け取る学生の主体的取り組みをサポートするしくみを、同時に作っていく必要がある。

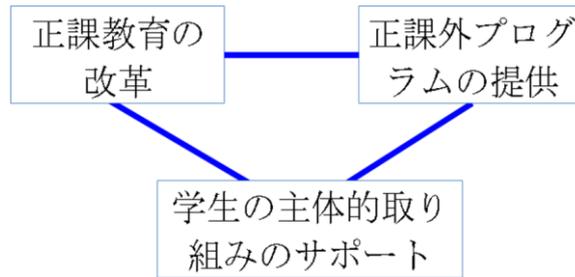


図 1-2 キャリア教育の体系

先進的経験に学ぶ

実際にキャリア教育の内容をどう構成していくかという点では、先進的経験に学ぶことが大切である。本取組においては初等教育および GP を参考にした。

初等教育においては、そもそものはじめからユニバーサル段階の教育が目指されており、スローガンのように「すべてのこどもに基礎学力を」ということになる。ここで、「こども」を「学生」に、「基礎学力」を「社会人基礎力」に置き換えると、「すべての学生に社会人基礎力を」となり、これはまさにユニバーサル段階の教育を目指す大学・短期大学の一つのスローガンになりうる。したがって、初等教育はユニバーサル段階の教育という点では、大学・短期大学の「大先輩」であり、そこから学ぶべき点は多い。本取組においては特に以下の 3 点を参考にした。

- ・教育体系－到達目標型教育－

初等教育においては、学習指導要領から日々の授業の構成まで到達目標型教育が貫かれている。

- ・学習者の主体性のサポート－ポートフォリオ－

生活科あるいは総合的な学習の時間の教育目標をみると、コミュニケーション力や情報収集力、問題解決力など、(そのレベルは異なるものの) 社会人基礎力と共通したものが多い。生活科の中で児童の主体的な学習をサポートするものとしてよく導入されているのがポートフォリオである。

- ・教育計画の策定－教員の集団的討議－

新しい教育プログラムや教材の開発に当たっては、個々の教員任せにすることなく、教員の集団的討議によるところが大きい。

GP は先進的経験の宝庫であり、参考にすべき点が多い。特に、本取組においては、以下の 3 つの GP を全面的に参考にさせていただいた。改めてここに謝意を表したい。

- ・入学前教育について

同志社大学、2007 年度特色 GP、「学生と教員の幸せな出会いをめざす導入教育」

- ・カリキュラム・マップについて

山口大学、2008 年度教育 GP、「目標達成型大学教育改善プログラム」

- ・e ポートフォリオについて

金沢工業大学、2006 年度特色 GP、「学ぶ意欲を引き出すための教育実践－KIT ポートフォリオシステムを活用した目標づくり－」

1. 2 全体概要

取組の全体像

以上を踏まえ、キャリア教育として具体化した本取組の全体像は次のようになる。

①正課教育の改革

カリキュラム・マップ作成をてこに、「何ができるようになるか」を重視した到達目標型教育への転換を図る。専門教育の改革はもちろん、入学前から学ぶ動機を高めるための入学前学習レポートを導入し、体験研修、実習を重視する。

②正課外プログラムの提供

以下の3つのプログラム群により、上記の正課教育の改革を支援し、さらに建学の精神に立脚したキャリアマインドの喚起、直接の就職支援を行う。

- ・社会人基礎力の意識化のためのプログラム

自己発見レポート、社会人基礎力診断、自己の探求

- ・建学の精神に基づくプログラム

伝統文化の講演、こころの講演

- ・就職活動支援プログラム

就職対策講座、資格取得支援講座、キャリアアドバイザーとの面談、求人開拓

③学生の主体的取組のサポート

eポートフォリオを、キャリア教育における学生サポートのコアツールとして活用することにより、学生が自ら計画・実践し、総括する力を身に付けられるようにする。

④教職員の共同作業のサポート

教職員共用ポートフォリオによって、教職員が共同してキャリア教育の質の改善を継続して行っていく。

到達目標型教育への転換と社会人基礎力育成

到達目標型教育への転換は、個別科目における社会人基礎力育成の観点の意識化・目的化のためにも重要である。

教員は、学生が何ができるようになるかという観点から担当科目の内容を吟味、整理し、科目の到達目標を3~4つあげる。さらに、それらの到達目標と所属学科のディプロマ・ポリシーの各項目との相関を明示する。この作業によってできあがるのがカリキュラム・マップである。この手順からわかるように、カリキュラム・マップとは、ディプロマ・ポリシーの各項目と科目の具体的到達目標との相関を示したマップのことであり、カリキュラム・ポリシーの表現の1つである。他の表現と比べると、カリキュラム・マップによって、ディプロマ・ポリシーの各項目の実現をどの科目群によって達成するのかを明示的に示すことができる点にその優位性がある。図1-3、図1-4にそれぞれライフデザイン学科、こども保育学科のカリキュラム・マップの一部を示す [3]。

教員はカリキュラム・マップ作成の作業を通じて、担当科目の目標が、①基礎学力、②専門知識、③人間性、④社会人基礎力の4つのカテゴリーにどのように配分されているかを意識せざるを得ない。また、学科も、提供しているカリキュラムの全体について、①~

④への配分を意識せざるを得ない。これが先に述べた、個別科目における社会人基礎力育成の意識化・目的化へとつながる。

ライフデザイン学科カリキュラムマップ

ディプロマポリシー	① カリキュラムの多面的な履修を通して、豊かな人間形成をおこない、幅広く深い現代的教養を身につける。 ② 体系的な学習を通して、現代の多様な課題を見つけ、問題を解決する判断力を身につける。 ③ 自らの人生の目標に向かって努力し、実践できる人材となる。 ④ 社会の変化に対応して、生涯を通して自らを高めることができる。 ⑤ 自らの立場を相対化し、広い視野から他者と協働できる。 ⑥ 学んだことや考察した結果を適切な手段によつて的確に表現することができる。
-----------	---

学 科 目	単 位	配 当 年 次	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号*						
					凡例 ◎: DP達成のために特に重要な目標 ○: DP達成のために重要な目標 △: DP達成のために望ましい目標						
					①	②	③	④	⑤	⑥	
ライフデザイン総論	2	1	ライフデザインの学びの基礎を理解する	1. 社会の動向を考える 2. 自分の進路について考える 3. 光華におけるネットワーク(メール、ウェブ)の使い方を習得する 4. 情報倫理について理解する	◎		○				
ライフデザイン特論A	2	2	Flashアクションスクリプトによるゲーム作成の基礎を学ぶ	1. 簡単なアクションスクリプトで絵を動かすことができる 2. アクションスクリプトの中で簡単な制御命令で処理の順番を制御することができる 3. アクションスクリプトで簡単なゲームを作ることができる	△	○					○
ライフデザイン特論B	2	2	住居・インテリアでの学びを駆使して、生活者プロフィールにふさわしいプラン設計とプレゼンテーションを行う	1. 生活者にふさわしい設計コンセプト作成とプレゼンテーション 2. プラン作成と製図 3. インテリアパース(または模型)の制作	○			△			○

図 1-3 ライフデザイン学科のカリキュラム・マップの一部

こども保育学科カリキュラムマップ

ディプロマポリシー	① 保育者として必要な専門知識・技能の習得に努める ② 幅広い教養を身につける ③ 保育の対象となる人の状態、家族、地域の人の状況などを正しく判断し、その都度適切な援助行動や支援を行なうことができる ④ 保育者としての資質向上へ意欲を持ち、保育ニーズの変化に対応できる ⑤ 利用者に対してだけでなく、地域の子育て支援者としての責任を持った行動を取ることができる ⑥ チームワークを大切に、周囲と良好なコミュニケーションをとることができる
-----------	---

学 科 目	単 位	配 当 年 次	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号					
					凡例 ◎: DP達成のために特に重要な目標 ○: DP達成のために重要な目標 △: DP達成のために望ましい目標					
					①	②	③	④	⑤	⑥
仏教学 I	2	1	仏教の基本思想について、理解を深める	1. 個々のいのちの重さを理解する 2. 自然環境をふくめ他との共生に留意する 3. 仏教用語に慣れる	○	△	○		◎	○
仏教学 II	2	1	校訓「真実心」の意味を理解し、それが人間の生き方の基本であることを学ぶ	1. 「真実心」とは、今ここに生きている自己の生命の真実であることを理解する 2. 「小さい自分」への執着を捨て、「大きい自分」の生命を生きる大切さを理解する 3. 自己の「真実心」は、如来の「慈悲心」と一つに生きていることを知る	△	◎	○			◎
憲法	2	2	国の最高法規であり、私達の生活の根本を規律している憲法について学ぶ	1. 憲法の基本原理を理解する 2. 日常生活における事例を通じ、具体的理解を深める	○	◎				

図 1-4 こども保育学科のカリキュラム・マップの一部

さらに、カリキュラム・マップによって、学科のディプロマ・ポリシーと教育体系の整

合性のチェックが常に可能になる。また、後述するように、ディプロマ・ポリシーの各項目の達成度を定量的に評価することも可能になる。したがって、カリキュラム・マップは、FD も含む到達目標型教育への転換へ向けた取組のための最も基本的なドキュメントとなるものである。

スケジュール

本取組の学生からみたスケジュールは図 1-5 のようになる。

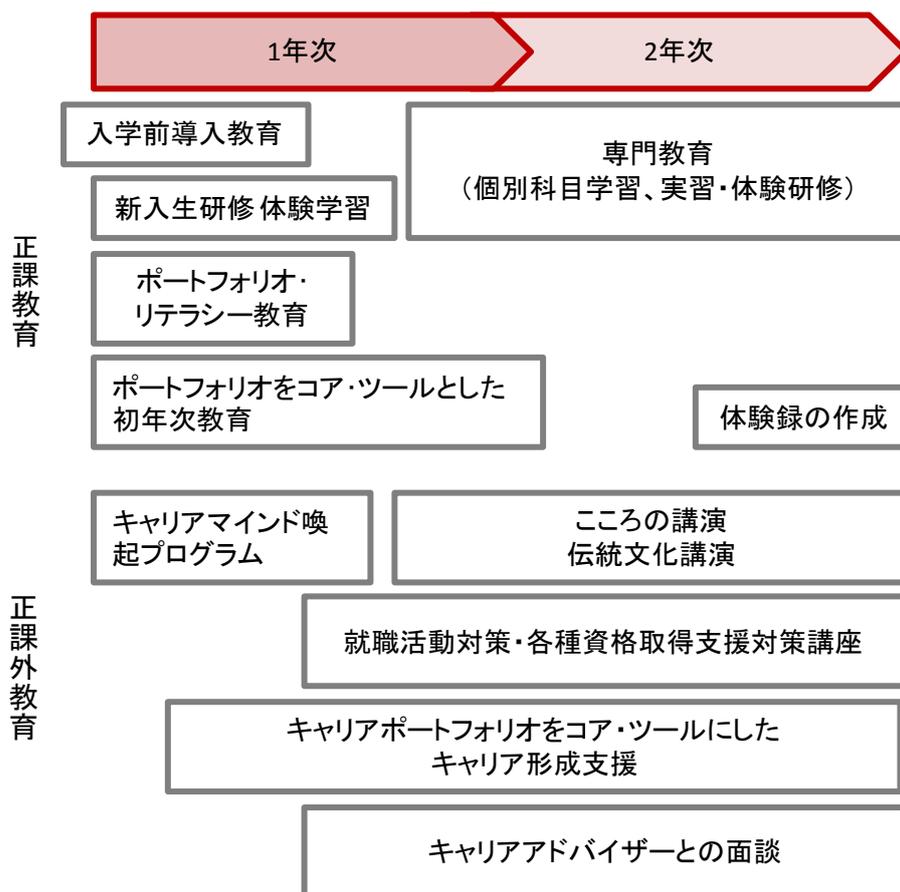


図 1-5 スケジュール

1. 3 取組体制

評価方法

本取組の目的は、「短期大学士力⇌社会人基礎力」の養成にあるので、具体的に社会人基礎力をどの程度身に付けたかを測る評価指標をどう設定するかが重要になる。もちろん、就職率は実際上最も重要な指標なのだが、就職率には、社会の状況の変化が規定的要因として作用するので、学生の社会人基礎力を直接評価するための指標としては適当ではない面がある。そこで、社会人基礎力を直接測るものとして、本取組においては以下の評価指標を採用する。

- ・社会人基礎力診断テスト

これは一般的な（ディプロマ・ポリシーとは無関係な）社会人基礎力を測ることしかできないが、全国平均との比較が可能となる。また、平成 21 年度（すでに実施

済み) と平成 22 年度の結果を比較することにより、社会人基礎力養成への本取組の効果を一定程度検証することが可能であると期待される。

・ディプロマ・ポリシーの達成度の学生自己評価

ディプロマ・ポリシーは、社会人基礎力の内容を学科の目的に合わせて具体化したものとみなすことができるので、ディプロマ・ポリシーの各項目の達成度を評価する指標が重要になる。本取組においては、ディプロマ・ポリシーの各項目に対して、関連のある科目の到達目標について学生が自己評価を行い、それを関連の深さによって重みづけし加算することによってディプロマ・ポリシーの達成度の学生自己評価を定量化する。具体的な学生の自己評価には、後述の達成感ポートフォリオを用いる。

・ディプロマ・ポリシーの達成度評価

さらに、これは成績評価システムの改良が前提となるが、教員が各科目の到達目標を数値化することにより、上と同様の重みづけにより、教員から見たディプロマ・ポリシーの達成度を定量化することができる。

本取組においては、上述の評価指標をはじめ、学生授業アンケート等多様な方法で、取組の評価を行う。また、取組全体に対して第三者による外部評価も実施する。

取組の結果の詳細については「2. 取組の実施結果」に詳述するが、ここでは上にあげた3つの指標の結果について簡単に記しておく。社会人基礎力診断テストについては平成21年度の1, 2年生と平成22年度の1, 2年生の結果を比較したところほとんど差は見られなかった。ただし、本取組の内容を2年間を通して受けた学生はまだいないので、この結果から結論を出すには時期尚早であるとする。ディプロマ・ポリシーの達成度の学生自己評価については平成22年度に初めてのデータがでた。したがってまだ何かと比較するというわけにはいかないが、今後の教育改革の新しい出発点に立ったといえる。ディプロマ・ポリシーの達成度評価については残念ながら平成22年度には実現できなかった。平成23年度以降の課題である。

実施体制

本取組の実施体制は図 1-6 のようになる。

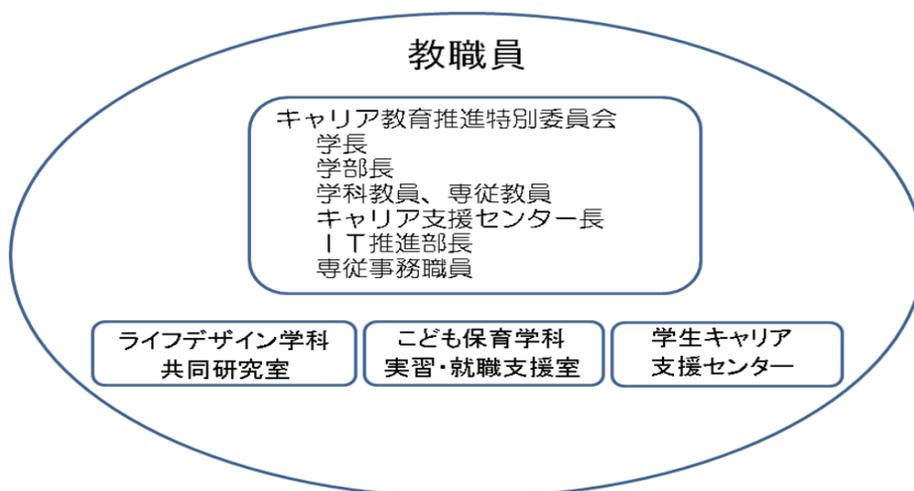


図 1-6 実施体制

本取組の推進のため、新たにキャリア教育推進特別委員会を設置した。本取組は、各学科、キャリア支援センター、IT 推進室にまたがった全学的な共同作業となるため、委員会にはそれぞれの組織から委員を選出した。さらに、専従の教員、事務職員も配置した。

平成 22 年度の委員会のメンバーは次の通りである。

学長	一郷正道
短期大学部長	中嶋哲生
ライフデザイン学科教員	森際孝司 相場浩和
こども保育学科教員	吉村啓子
専従教員	稲垣久美子
キャリア支援センター長	田村伸一
IT 推進部長	伊藤勝久
専従事務職員	植村悦子
修学グループ職員	河村万里 (オブザーバー)

参考

[1] <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>

[2] <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/ikuseinotebiki.pdf>

[3] カリキュラム・マップの全体は、以下の URL を参照のこと。

ライフデザイン学科：<http://www.koka.ac.jp/faculty/junior/lifedesign/curriculum.html>

こども保育学科：<http://www.koka.ac.jp/faculty/junior/childcare/curriculummap.html>